AJIBI News vol. 100

あじびニュース



100号の表紙には、日々美術館を支える
あじびスタッフが部署の垣根を超えて登場。
諸般の事情により登場できなかったスタッフも、
あじびの仲間として下記に名前を掲載します。
中尾智路、藤井泉、宮川緑（学芸課）
加藤昴樹（魅力向上課）
松野光沙、大曲律子（運営課）

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

あじびニュース創刊100号記念特集

あじび「コレクション」とミュージアムの未来

次の100号を目指して、地域の宝であり、アジア美術の知財でもある所蔵作品をテーマに、あじびの歩みと未来について考えます。
学芸スタッフ8名それぞれが選んだ「あじびの未来」を映す一作とは。

1979 福岡市美術館 開館 ⟶ **1999** 福岡アジア美術館 開館 ⟶ **2026** 福岡市、アートのまちへ

【市美からはじまり】⟶【あじびへとつなぎ】⟶【作品を未来へ託す】

1985 収蔵 ロベルト・フェレオ［フィリピン］

《スペインの暗い側面の祭壇屏》
1985年、アクリル、おがくず・木

あじびのはじまりを象徴する唯一無二の存在。

山木裕子
学芸課長





約4×3メートルの圧倒的なスケールと、さまざまな素材や比喩、複雑な構造を通して「フィリピンとは何か」という問いに真正面から迫る、アジア現代美術の記念碑的な作品。作者のロベルト・フェレオは、福岡市美術館で開催された「第2回アジア美術展」の出品作家であり、「アジア現代作家」シリーズの第1回展を飾った作家です。福岡市美術館における活動から、当館が誕生する訳ですが、その歩みを語る上でフェレオは不可欠な存在と言えます。30代前半で本作を完成させたのですが、昨年惜しまれながらこの世を去りました。しかし、彼の作品は色褪せることなく、私たちに問い続けています。これからも多くの人に鑑賞され、新たな対話を生み出していってほしいです。

1995 収蔵 リュー・ションジョン（呂勝中）

［中国］《〇》1991年、紙

受け継がれゆく、中国の民間芸術の美。

佐々木玄太郎
収集展示係



「切り紙」という中国の民間芸術を、巨大な画面でダイナミックに展開させた作品。呂勝中（1952-2022）は、現代美術の理論や方法を学びながら、模倣を超えた形でそれらを応用し、自身の背負う伝統文化と接続しました。彼が「第4回アジア美術展」に参加したことから、福岡市のコレクションに。その後、呂に切り紙を教えた廖淑蘭（1920-2004）や、呂の教え子である鄔建安（1980-）の作品も、あじび所蔵作品に加わりました。彼ら師弟の作品群は、アジアの民間芸術が現代の表現としていかに展開しているかを示す一例です。この大迫力は100年後も人々を圧倒し続けるでしょう！

1996 収蔵 グエン・ファン・チャン［ベトナム］

《オーアンクァン遊び》1931年、絹本着色

100年後も変わらず、人の心を穏やかに映す。



楽原ふみ
交流・教育係

地面に座りこんでおはじき遊びをする子どもたちが、白や茶、黒など落ち着いた色彩で詩情豊かに描かれた作品。ずっと眺めたくなる穏やかな画面は、顔料を洗い流しては染めるように絹に描く、ベトナム独自の絵画ジャンルの「絹絵」らしい表現です。本作はあじびができる前のこと、福岡市美術館時代に「東南アジア 近代美術の誕生」展に展示されたのを機に収蔵されました。同展は、現在のあじびの東南アジア近代美術コレクションの礎を作りました。約100年前の作品にも関わらず、常に「どこか懐かしく親しみを感じる」と人気を集めています。たとえ時代が変わろうとも、私たちの心の中にある幼い頃の無邪気さとかけがえのないものを呼び起こしてくれます。

100号の今、私たちが伝えたいもの

美術はもっと自由で開かれたものである。

椋橋彩香
収集展示係



1998 収蔵 サヤー・ソオ［ミャンマー］

《王室の肖像》19世紀末－20世紀初頭、グワッシュ・布

ミャンマー（ビルマ）で英国植民地時代の19世紀末～20世紀初頭に描かれたものです。この時代の絵画は、ヨーロッパの影響とビルマの宮廷絵画の伝統を融合させた独自性の高い作品が見られます。あじびでは「ミャンマー初期洋風画」としていち早く紹介してきました。このような絵画は現在は美術館に展示されていますが、制作された当時は例えば僧侶の葬儀などで飾られていました。葬儀は祝祭的なもので、祭りのように盛大に行われました。つまり、美術は民衆の生活の中にあり、誰でもそれを観て楽しむことができたのです。こうした背景を考える時、この作品は、本来美術は誰にでも開かれたものであるということを教えてくれます。

2003 収蔵 ライオネル・ウェント

［スリランカ］
《シンハラ人漁師のトルソ》
1936-37年頃
ゼラチン・シルバー・プリント



嶋津ほのか
収集展示係

多様性時代の過去・現在・未来を問う。

スリランカ近代美術の草創期を代表する写真家、ライオネル・ウェント（1900-1944）。実験的モダニズム表現のほか、男性身体に対する同性愛的なまなざしが特徴です。死後長らく世間から忘れられていましたが、1993年頃より再評価が始まり、あじびでは「ライオネル・ウェント写真」展の際に収集しました。近年は「LGBTQと多様性社会」（当館、2019）をはじめとし、クィア・アートの文脈で語られることがしばしば。英国植民地下ゆえ同性愛が犯罪であった時代、そこから約100年の今、彼の作品はジェンダーやセクシュアリティの文脈で語られ、社会の変化を感じさせます。未来の社会で、この作品はどのように見つめられるのでしょうか。

2005 収蔵 ホー・ズーニエン［シンガポール］

《ウタマ―歴史に現れた名はすべて我なり》
2003年、転写インク、アクリル・画布、ビデオ（21分）

未来のスター作家は身近なところに。

中尾智路
交流・教育係長



ホー・ズーニエンさん、今年の「福岡アジア文化賞」大賞の受賞おめでとうございます！彼にはじめて会ったのは、2004年のシンガポール調査の時でした。まだ日本でも未紹介の作家でしたが、このアーティストであればと、「第3回福岡アジア美術トリエンナーレ」の候補作家にリストアップしました。でも意外だったのは、作家選考委員会で評価が分かれたこと。どんなにいいアーティストであっても、それは十分に起こりうることです。しかしそれでも、自分たちの見方を信じて発信し続けることが、あじびの存在意義だと思っています。可能性を秘めたアーティストはまだまだいます。もっと紹介していきたいですね。

2006 収蔵 ハーディム・アリー［パキスタン］

《誰もいない台所1》2006年、水彩、鉛筆、金箔ほか・紙

子どもの感性に驚かされた、ライオンの絵。

中尾智路
交流・教育係長



昔、モンゴルの子どもの絵にすごく感心したことがありますが、福岡にもこんな魅力的なライオンを描く子どもがいるのかと驚きました。そのライオンが登場するのは、ハーディム・アリーのレジデンス作品《誰もいない台所》。彼の家族はタリバーンによる混乱と暴力から逃れるために、アフガニスタンを離れざるをえなかったのですが、それゆえにアリーはアフガニスタンと福岡の子どもをつなぐワークショップを開催しました。その後、アリーは子どもたちが描いた絵（ライオンやタリバンの兵士など）を散りばめて本作を完成。社会的な意義もさることながら、子どもたちの観察眼とその絵の魅力にはっとした活動でした。こうしたワークショップに参加した子どもたちが、素敵な大人になっていたら最高ですね。

2006 収蔵 ナリニ・マラニ

［インド］
《ハムレットマシン》
1999-2000年、
4チャンネルビデオ（20分）、塩

全てはここから。レジデンス第1号作品



蒲池昌江
交流・教育係

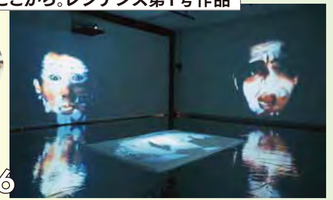




Photo by Kaoru Imamura

記念すべき最初のレジデンス作品で、福岡の舞踏家・原田伸雄さんの協力を得て制作した実験的な作品です。私にとっても、はじめて6か月という長期のプログラムに携わり常時緊張していたことを覚えています。滞在の最後にナリニさんから事業への助言をしてもらい、それが現在のレジデンス事業のベースになっています。原田さんの身体表現をとおして、原理主義者による暴力や女性への抑圧、環境や遺物破壊などの問題を象徴的に描きだしたこの作品が、未来の人々とどのように呼応していくのか、果てしなく想像が広がります。

2016 収蔵 チュンリン・ジョリーン・モク［香港］

《店を見る》2015年、ビデオ（14分）

まちの記録は、未来の宝になる。

山木裕子
学芸課長



担当したレジデンスの中でも、特に印象深い作品の一つです。川端通商店街の16店舗をメインとした映像作品で、各店舗の開店シーンから始まります。何気ない日常の記録でありながら、温かな気持ちになる作品です。また、お店とお店をつなぐ、かわいらしいナレーションによるストーリーも必見です。リサーチから依頼、撮影のほとんどに同行したのですが、完成した作品の世界は自分が見た風景とはまるで違って、厳かな美しさがあり、こちらの想定を遥かに超えてくる作家の創造力に、本当に驚かされました。協力店の中には、残念ながら閉店した店舗もあります。本作は2015年のまちの姿を映し出す貴重な記録。ぜひ多くの方にご覧いただきたいです。



新しい「美術」を見出す旅はまだまだ続く。

五十嵐理奈
収集展示係長

2019 収蔵 作者不詳［インド］《チャンドラ（月神）》

1910年代、オレオグラフ、スパンコール・紙

インド大衆宗教版画のコレクターである黒田豊氏の40年にわたるコレクション最初の一枚。2019年、その全コレクション数千点を寄贈していただきました。これはあじびが日本に蓄積されてきたアジアを収蔵することとなった原点です。近現代美術だけではなく、人々の生活とともにある大衆・民俗美術を収集することを方針に掲げてきたあじび。黒田氏のコレクションのなかには、必ずしも収集方針にドンピシャではない作品もありました。しかしだからこそ、所蔵作品と資料の線引きや分類方法、収集方針の再検討が促され、美術館自体の新陳代謝につながりました。月が満ちても欠けても空を旅し続けるチャンドラのように、あじびが新しい「美術」を見出せる旅をつづけられますように。



黒田豊氏（駐ヤンゴン日本国大使館のオープニングにて）

あじびとまちの未来

1999年の開館以来、アジアの近現代美術を専門に扱う世界で唯一の美術館として活動してきたあじび。さらなる魅力向上のため、施設拡充が行われます。プロジェクトメンバーが描く未来とは？

あじびは「まちとともにある」美術館

山木（以下 山） 私は開館前からあじびに在籍していますが、お二人は最近異動してこられましたよね。どんな印象を持ちましたか？

大隈（以下 大） 福岡は地理的にアジアと近く、交流拠点として発展してきた都市。あじびはその象徴の一つだと思います。一歩中に入ると多彩な作品が並んでいて、作家たちがさまざまな言語で意見を交わしている。日常の延長線上にアジアがあるような感覚です。歴史と伝統が息づく博多のまちに、これほど国際色豊かな場所があるのは面白いですよね。

鴨川（以下 鴨） 私は以前、福岡市美術館（市美）で勤務したことがありますが、美術館としてのあり方が大きく違うと感じました。市美は建物そのものが「美術館」として認識されていますが、あじびはビルの中にあるため、外からは存在が見えにくい。そして、同じビルの関係者の方々と協力し合い、地域を豊かにしていく面白さがあります。単独で完結するのではなく、まちとともにある美術館。これは他にはない魅力だと思います。



山木裕子 学芸課長
あじび創設メンバー。収集展示から交流事業まで幅広く経験。

大隈清司 魅力向上課長
2026年より勤務。文化行政・まちづくりの視点で拡充に携わる。

鴨川直史 運営課長
2023年より勤務。美術館の運営管理や博多リバレインに関わる地域との調整を担う。

作品の奥に見えるアジアの「今」

大 実は異動してくるまで、アートにほとんど縁がなかったんです。そこで勉強のためにいろんな美術館を回ったのですが、あじびには単に「美しい絵」を見るだけではない深みがあることに気づきました。作品の一つひとつにその国や地域の複雑な背景が込められていて、作家のメッセージを考察する楽しさがあります。気分転換したい時にはマリンワールドに行くのが私の定番でしたが、最近は館内で作品をぼんやり眺める時間が増えました。

鴨 現代美術には、アジアを知るヒントが詰まっていますよね。そこで生きる人々の思いがより色濃く表れているように感じます。「アジアの『今』を伝える」というあじびの基本理念は、この美術館の存在意義をよく捉えているなと思います。

まちの資源としてあじびを盛り上げる

山 当初は1000点程度だった所蔵作品も今では6000点近くに増え、展示スペースも収蔵スペースも不足している状況です。そこで今回のプロジェクトでは、警固公園の地下駐車場跡地を新たな拠点として活用し、地上の公園や舞鶴のArtist Cafe Fukuokaとも連動しながら、活動の幅を広げていきます。これまでは館内の職員が主体でしたが、最近は市全体で「あじびを盛り上げよう」という空気を感じますね。あじびがまちの資源としてより認識されはじめてきたのだと思います。施設拡充をきっかけに、この意識が市民にも広がると嬉しいです。



大 竣工は2032年以降を予定していますが、すでに市民から期待の声が寄せられています。「こんな施設になったらいい」という具体的な意見が多いことにも驚いています。かつての駐車場が、新たな文化拠点になるという未来に対して、多くの人が希望を持ってくださっているんだなと実感します。

偶然アジア美術に出会い、親しめるまちへ

山 今のあじびは「展覧会を観に行こう」という目的を持って来られる方がほとんど。でも次の拠点は天神のまちなかで、誰もが自由に集える公園にあります。「暑いからちょっと入ってみよう」とか、「バスが来るまで時間をつぶそう」というように、ふとしたきっかけでアジア美術に出会っていただきたいです。

鴨 天神進出を機に、川端地域で接点のなかった事業者とも連携できればさらに面白くなる気がします。例えばファッションなど。そして観光客がたくさん来て、市民から「混みすぎて入れないじゃないか」と怒られるくらい愛される場所になったら最高ですね。

大 待ち合わせ場所として気軽に使っていただくのもいいですよね。私の若い頃は「天神コア前に集合」が合言葉でしたが、数年後には「あじびに集合」が日常になっているかもしれない。考えるだけでワクワクします。

山 先日、離島で地域の皆さんを対象にあじびの話をさせてもらったのですが、多くの人にアジア美術の魅力を届けるには、まず興味を引き出すきっかけが大切なのだと感じました。まちなかで偶然に出会い、何だか面白そうと感じてもらうことから始まり、気づけばアジア美術に親しんでいる。そんな環境を、この福岡でつくっていけたらいいなと思います。

「美術館で待ち合わせ」が、見慣れた風景になる。

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum
〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7・8階
TEL 092-263-1100　FAX 092-263-1105
https://faam.city.fukuoka.lg.jp

あじびニュースvol.100　2026年9月1日発行
企画・編集・発行：福岡アジア美術館　編集・執筆：後藤麻与、片桐絵都
デザイン：吉田朋史［9P］　印刷：アカマ印刷

感想アンケート

100号発行を機に、ご感想やご要望を募集しています。今後のあじびニュース製作の参考にしますので、ぜひ皆さまのお声をお聞かせください。

ギャラリー観覧時間	9:30-18:00（金曜・土曜は20:00まで）※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間	9:30-19:30（金曜・土曜は20:00まで）アートカフェ等
休館日	毎週水曜日（水曜が休日の場合はその翌平日、ただし8月中は無休） 年末・年始（12.26－1.1）

ARTIST IN RESIDENCE 2026

今年度も国内外から注目の作家を招聘します。
第1期の成果展は9月に開催。
随時詳細はHPにてお知らせします。

2026. 9.19［土］～10.5［月］
第26回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

会場：Artist Cafe Fukuoka (福岡市中央区城内2-5)スタジオ、ギャラリー
※詳細は当館HPをご覧ください。※入場料無料

第1期アーティスト
滞在期間：2026年7年15日—10月8日

アムシャド・スヌワール
Amshad Sunuwar
［1993年生まれ、ネパール・カトマンズ拠点］

「ヒマラヤアートフェスティバル2025」など同国内を中心に活動。ネパールの伝統的文化と離れた環境で育ったことから、文化の衰退や消失とアイデンティティの関係を問う作品を手がけてきた。福岡では、フロッタージュ(こすり出し)の技法で個人とコミュニティの記憶や物語を浮かび上がらせる作品を制作。


《Ambiguity within Rote Learning》2025年




《Closer》2024年


《Paying Homage》2021年

福岡はネパールと比べるととても暑いので、気候に慣れるのが大変ですね。楽しみなのはラーメンとアニメ！色々なものを食べたり見たりして福岡での滞在を満喫したいです。

ハン・ハン Hằng Hằng
［1995年生まれ、フランス・パリとベトナム・ハノイ拠点］

ヨーロッパが活動の中心だが、昨年は「瀬戸内国際芸術祭」の関連プロジェクトにも参加。何気ない物語や記録の断片を通して、太古の昔から人間に受け継がれてきた感覚的な記憶を探求し、日常を異化させる作品を制作してきた。福岡では、生活や自然との関わりの中に立ち現れる聖なるものについてリサーチする。

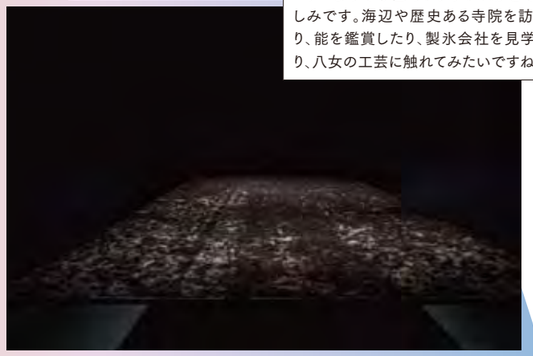
Photo by HUNG NGUYEN



福岡は近代的で活気があり、人々もフレンドリーなので今回のレジデンスがとても楽しみです。海辺や歴史ある寺院を訪れたり、能を鑑賞したり、製氷会社を見学したり、八女の工芸に触れてみたいですね。


《The reason is a dog. The reason is a flower》2023-25年


《Thi》2021-22年


《Unforgotten land》2025-26年（制作中）

イアン・ティー
Ian Tee
［1994年生まれ、シンガポール拠点］

昨年「ユナイテッド・オーバーシーズ銀行絵画展」でシンガポール部門最優秀賞を受賞。絵画や視覚文化における様式・素材の変化と社会の関係に関心をもち作品を制作してきた。福岡では第二次世界大戦の歴史や記憶をたどり、それらが人々にどう受け継がれているのかを探求する。

Photo by Michelle Yap

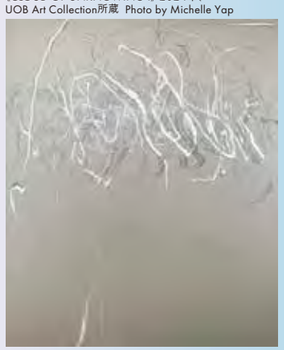


福岡はなじみやすく、移動しやすい印象です。夏ならではのお祭りやイベント、あとは大宰府天満宮の有名な梅の木も見たいですね。


《DEEP CUTS》2025年、シンガポール美術館 屋外展示風景
Image courtesy of the artist and Singapore Art Museum


《HISTORY KEEPS ME AWAKE AT NIGHT》2020-21年

《CLOUD OF UNKNOWING I》2024年、
UOB Art Collection所蔵 Photo by Michelle Yap



第2期アーティスト
滞在期間：2026年10月—12月

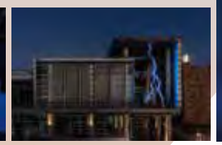
あじび× Pier-2 Art Center（台湾・高雄）交換レジデンス作家

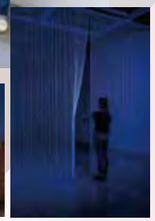
シエ・ヨウチョン（謝佑承）
Hsieh Yu-Cheng
［1992年生まれ、台湾・新北市拠点］

知覚に対する境界や解釈を問い直すインスタレーション作品を制作してきた。今回のレジデンスでは、福岡と台湾の近代史と電気・電力エネルギーの関係性をリサーチし、作品制作に展開させる予定。




《Fever Screen》2022年
Photo by Anpis Wang

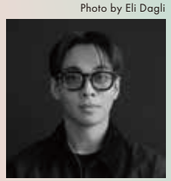

Hsieh Yu-Cheng×Chung-Yuan Wang
《High Voltage》2021年
Photo by Urban Art Studio


《Cyclorama》2023年
Photo by Anpis Wang

ジャン・マヨ Jan Mayo
［1991年生まれ、フィリピン・マニラ拠点］

肖像やアイデンティティ、人と自然の関係をテーマに写真作品を制作。福岡滞在中は、福岡在住のアジア出身者と協働してポートレイトを撮影予定。写真を通じて、移民としての経験やそのアイデンティティをいかに記録できるかを探求する。

Photo by Eli Dagli




《Drag Queen in Waiting》
2025年


《Curves and Shadows》
2022年


《Rhododendron weyrichii》
2025年

チョン・ユギョン
Jong YuGyong
［1991年生まれ、福岡拠点］

これまで朝鮮人の「移動」の歴史を検証し、恣意的に引かれる「境界線」や戦争と文化の関係性を問い直してきた。今回のレジデンスでは、自身のルーツの一つである西戸崎をリサーチし、かつて存在した米軍基地や朝鮮人集落の痕跡をたどる。

Photo by Hirohito Yamaguchi




《隔たるほどに、繋がりを知る》2025年
© 2025 EUREKA


《OMURA-yaki #3》2023年
Photo by Yuki Moriya


《OMURA-yaki #11》2024年
Photo by Yuki Moriya

第3期アーティスト
滞在期間：2027年1月—3月

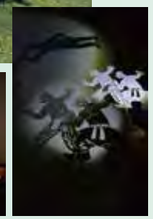
マハラニ・マンチャナガラ&ヌラフマット・ウィディヤセナ
Maharani Mancanagara
& Nurrachmat Widyasena
［ともに1990年生まれ、バンドン拠点］

記憶や技術、スペキュラティブ・ヒストリー（仮想の歴史）の関係性を探求してきたアーティストデュオ。福岡では、古くから様々な交流の窓口であった福岡の移民史や海洋交易、通信網をリサーチし、地域に残る物語や記憶の断片を収集していく。




ヌラフマット・ウィディヤセナ
《Nostaljik Kritik Operasi Taimket》2019年


マハラニ・マンチャナガラ
《Susur Leluri》2021年


《Hikayat Wanatentrem 3.0》
2025年

アジア美術の歩き方

南アジア 特別編

ASIAN ART WALK

対立の先へ〜
光の水脈をめぐる旅

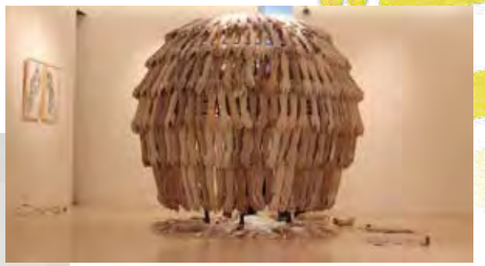
2026.9.19㊏
→2027.1.11㊊㊗

知らないからこそ面白い！
南アジア美術の扉をひらく旅。

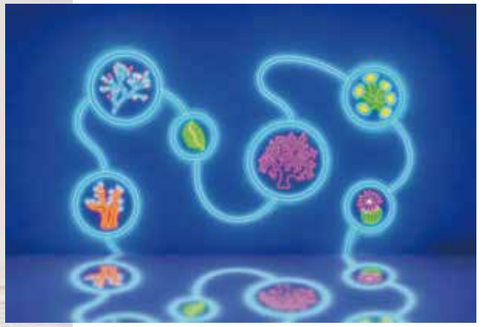
アジア美術に初めて触れる人にも親しみやすい形で
3つのエリアに分けて紹介するシリーズ展「アジア美術の歩き方」。
2回目となる南アジア特別編では、インド、パキスタン、バングラデシュ、
スリランカ、ネパール、ブータン、モルディブの現代美術作品が一堂に会します。
3名の担当学芸員が、本展の見どころや
企画に込めた思いを語りました。



左から
椋橋彩香
五十嵐理奈
佐々木玄太郎
（収集展示係）



ダリ・アル・マムーン[バングラデシュ]《抹消》2012年、作家蔵



イフティハール・ダーディー＆エリザベス・ダーディー[パキスタン]《水の底で》2026年、作家蔵 ※プラン図

第1部では「出会う」をテーマに、南アジアを代表する作家の所蔵作品や大型インスタレーション、近作・新作をご紹介。第2部では「ひもとく」をテーマに、絵画や彫刻など多彩な作品群約100点を展示し、7階フロア全体が南アジアの現代美術で溢れます。



コレクションカード（東アジア編）より

お気に入りの作品を お土産として持ち帰ってほしい

椋　今回、新たな試みとして、本シリーズを何度でも鑑賞できる年間パスポートを導入しました。また、お気に入りの作品を持ち帰る感覚で集められるコレクションカードの無料配布も始めました。

五　コレクションカードは人気すぎて、毎日あっという間になくなっちゃいますよね。

椋　「東アジア編」では1日20枚限定で配布しているので、午前中の来館がおすすめです。

五　同じアジアといえども、東アジア、南アジア、東南アジアでそれぞれ表現の傾向が異なります。年間パスポートも活用しながら、1年を通してじっくり見ていただきたいですね。例えば女性の描き方一つを見ても、東アジアは細身、南アジアは肉感的、東南アジアはS字のラインで表現しがちというように。そうした違いを見比べることで、それぞれの地域の価値観や歴史、社会情勢などが見えてくることもあると思います。

SOUTH ASIA Through the Veins of Light

作家との絆から生まれた、あじびならではの企画

佐々木（以下 佐）　ここまで南アジアの現代美術が集まる展覧会は、日本ではなかなかないですよね。

五十嵐（以下 五）　長年にわたってアジアの作家たちと関係を築いてきたあじびだからこそ実現できた企画だと思います。

椋橋（以下 椋）　そもそも、なぜ日本では南アジアの現代美術に触れる機会が少ないのでしょうか。

佐　単純に、知られていないからだと思います。アジアの中でも、特に南アジアは日本から地理的に離れていますし。

五　地理的な距離の遠さが、心理的な距離にも影響している部分もあるのかもしれません。「インド」と聞いて思い浮かぶイメージはあっても、近現代の社会や政治について知る機会はあまりない。だからこそまずは作品に出会って、その地域に興味を持ってもらえたら嬉しいです。

予備知識なしでも 感覚的に楽しめる

佐　本シリーズ展は入門編の位置づけなので、高度なテーマを掘り下げるというよりは、「アジア美術って面白いんだ」という入り口を作ることが一番の目的です。そのため、ビジュアルにインパクトのある作品を選ぶなど、予備知識がなくても感覚的に楽しめる展示を意識しました。

五　二つの展示スペースをフルに使った規模感もポイントです。第1部では、スター作家による大型インスタレーションや代表作を通して、まずは作品そのものの迫力を体感していただきます。続く第2部では、政治や宗教などのテーマやポップな大衆美術も含め、各国の背景を読み解くような展示構成にしています。

椋　あじびが初期作品を所蔵するイフティハール・ダーディー、ダリ・アル・マムーン、アーイシャ・ハーリドなどについては、近作や新作もあわせて展示しています。約20年前と今の表現を見比べながら、創作の歩みをたどれるのも見どころですね。いわゆる回顧展だと個展であることが多いですが、同じ地域の複数の作家をまとめて紹介できるのは、本展ならではだと思います。

五　アジア美術に馴染みのない人にも伝わるよう、タイトル決めにもかなり議論を重ねましたね。南アジアの特徴を一言で表現することの難しさから、テーマを先に設定するのではなく、メイン作品のビジュアルを起点に言葉を組み立てていきました。そうして生まれたのが「光の水脈をめぐる旅」というタイトルです。一方で、この言葉だけでは、南アジアが抱える植民地支配の歴史や宗教対立といった複雑な背景まで表せない。そこで「対立」というキーワードを抽出し、同時に光も感じられる「対立の先へ」という言葉を加えました。

アーイシャ・ハーリド[パキスタン]《愛の庭は、限りなく緑である》2019年、作家蔵　撮影 Cheska Brown





ウダヤ・チャラン・シュレスタ [ネパール]《マハーラクシュミー》2005年、福岡アジア美術館

ラティーシュ T.[インド]《階段の途中》2014年、福岡アジア美術館



作家と歩み、アジア美術をつないでいく

佐　今回、事前の現地調査にもかなり力を入れました。作家のスタジオを訪ね、今どんな作品を制作しているのかを見せてもらい、近作や新作展示の交渉を進めていきました。

椋　みんな南アジアを代表する作家ですが、とても気さくに受け入れてくれましたよね。

五　初期の頃からともに歩んできたという思いを、あじびに対して持ってくれているからでしょうね。例えば、今や世界各国で数々の賞を受賞しているナリニ・マラニも、1999年のレジデンスであじびに来てくれました。彼女の代表作の一つである《ハムレット・マシン》は、福岡滞在中に制作したものです（裏面でも紹介）。今招聘しているレジデンス作家も、30年後には同じようにスター作家に成長しているかもしれない。そうした歩みを積み重ねながら、今回のような企画展がまた未来へとつながっていけばいいですね。

さらに
"福岡初"が満載！
南アジアの文化に浸る
スペシャルライブ＆
トークイベントも開催！

展覧会HPはこちら

ARTIST IN RESIDENCE 2026

今年度も国内外から注目の作家を招聘します。
第1期の成果展は9月に開催。
随時詳細はHPにてお知らせします。

2026. 9.19［土］～10.5［月］ 第26回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

会場：Artist Cafe Fukuoka（福岡市中央区城内2-5）スタジオ、ギャラリー
※詳細は当館HPをご覧ください。※入場料無料

第1期アーティスト

滞在期間：2026年7月15日～10月2日

アムシャド・スヌワール
Amshad Sunuwar
［1993年生まれ、ネパール・カトマンズ拠点］

「ヒマラヤアートフェスティバル2025」など同国内を中心に活動、ネパールの伝統的文化と親和性の高い作風で知られる。文化の異質や消失とアイデンティティの関係を問う作品を手がけてきた。福岡では、プロダクションにより出した技法で個人とコミュニティの記憶や物語を浮かびとがらせる作品を制作。




（Ambiguity within Role Learning）2025年
（Colour）2024年
（Playing Homage）2021年

福岡はネパールと比べると とても暑いので、気候に慣れるのが大変です。美しみなのはラーメンとアニメ！色々なものを食べたり見たりして福岡での滞在を満喫しています。

ハン・ハン Hằng Hằng
［1993年生まれ、フランス・パリと ベトナム・ハノイ拠点］

ヨーロッパが活動の中心だが、昨年は「瀬戸内国際芸術祭」の関連プロジェクトに参加。何気ない物語や記録の断片を通して、大古の昔から人間に受け継がれてきた感覚的な記憶を探求し、日常を異化させる作品を制作してきた。福岡では、生活や自然との関わりの中に立ち現れる聖なるものについてリサーチする。





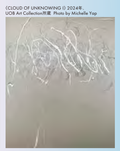

（The reason is a dog. The reason is a flower.）2022-23年
（Tu）2021-22年

福岡は近代的で活気があり、人々もフレンドリーなので今回のレジデンスがとても楽しみです。海辺や歴史ある寺院を訪れたり、能を鑑賞したり、製糸会社を見学したり、八女の工芸に触れてみたいです。

イアン・ティー Ian Tee
［1994年生まれ、シンガポール拠点］

昨年「ユイティナ・オーバーシーズ銀行総展」でシンガポール部門最優秀賞を受賞。絵画や視覚文化における様式・素材の変化と社会の関係に関心をもち作品を制作してきた。福岡では第二次世界大戦の歴史や記憶をたどり、それらが人々にどう受け継がれているかを探求する。





（DEEP CUTS）2023年、シンガポール美術館 提供者の厚意 Image courtesy of the artist and Singapore Art Museum
（Unforgotten land）2023-24年（制作中）

福岡はなじみやすく、移動しやすい印象です。夏ならではのお祭りやイベント、あとは大宰府天満宮の有名な梅の木も見たいです。

（COLD OF UNKNOWING）© 2024年、UOB Art Collection/提供 Photos by Michelle Yap
（HISTORY KEEPS ME AWAKE AT NIGHT）2020-21年

第2期アーティスト

滞在期間：2026年9月15日～12月

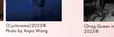
あじび・Year 2 Art Centre（台湾・高雄）交換レジデンス作家

シエ・ヨウチョン（謝佑承）
Hsieh You Cheng
［1992年生まれ、台湾・新北市拠点］

知覚に対する境界や解釈を問い直すインスタレーション作品を制作してきた。今回のレジデンスでは、福岡と台湾の近代化と電気・電力エネルギーの関係性をリサーチし、作品制作に展開させる予定。



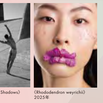


（Fever Scream）2022年 Photo by Anjo Wang
（Hush Yu Cheng × Cheng-Yuan Wang Digit Voltage）2021年 Photo by Urban Art Studio
（Cyclonema）2022年 Photo by Anjo Wang

ジャン・マヨ Jan Mayo
［1991年生まれ、フィジビーマニラ拠点］

舟後やウィディヤティ、人と自然の関係をテーマに不真作品を制作。福岡滞在中は、福岡在住のアジア出身者と協働してポートレイトを撮影予定。写真を通じて、植民地としての経験やそのアイデンティティ、ないかに記憶できるかを探求する。


（Drag Queen in Waiting）2022年
（Curves and Shadows）2022年
（Rhododendron weyichi）2023年

Photo by Eli Dogi

チョン・ユギョン
Jong YuGyong
［1991年生まれ、福岡拠点］

これまで朝鮮人の「移動」の歴史を検証し、忘意的に引かれた「境界線」や戦争と文化の関係性を問い直してきた。今回のレジデンスでは、自身のルーツの一つである西戸崎をリサーチし、かつて存在した米軍基地や朝鮮人集落の痕跡をたどる。





（無と余白）第巾冬和63）2023年 © 2023 EUREKA
（CHURA-uta #372023）年 Photo by Yuki Moriya
（CHURA-uta #11202）年 Photo by Yuki Moriya

Photo by Hirohito Yamaguchi

第3期アーティスト

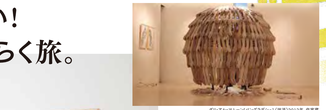
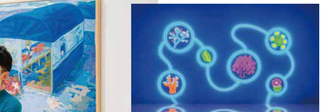
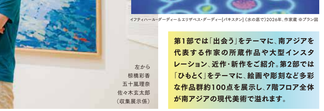
滞在期間：2027年1月～3月

マハラニ・マンチャガガラ＆ヌラフマット・ウィディヤセナ
Maharani Mancanagara
& Nurrachmat Widyasena
［ともに1990年生まれ、バンドン拠点］

記憶や検証、スペキュラティブ・ヒストリー（仮想の歴史）の関係性を探求してきたアーティストデュオ。福岡では、近くから様々な文脈インスタレーションや代表作を通して、まずは作品そのものの語力を体感していただきます。続く第2期では、政治や宗教などのテーマやポップな大衆美術も含め、国の背景を読み解くような展示構成にしています。

展　あじびが初野作品を所蔵するイフティハール・ガーディー、グリ・アル・マルーン、アーイシャ・ハーリドなどについては、近作や新作もあわせて展示しています。約20年前とpart.1の表現を見比べながら、創作の歩みをたどれるのも見どころですね。いわゆる回顧展だと個展であることが多いですが、同じ地域の複数の作家をまとめて紹介できるのは、本展ならではだと思います。

五　アジア美術に馴染みのない人にも伝わるよう、タイトル次めにもかなり議論を重ねました。南アジアの特徴を一言で表現するとの難しさから、テーマを先に設定するのではなく、メイン作品のビジュアルを起点に言葉を組み立てていきました。そうして生まれたのが「光の水脈をめぐる旅」というタイトルです。一方で、この言葉だけでは、南アジアが抱える植民地支配の歴史や宗教対立といった複雑な背景までは表せない。そこで「対立」というキーワードを抽出し、同時に光も感じられる「対立の先へ」という言葉を加えました。


ダリ・アル・マルーン「バングラデシュ」（「映演」2021年、作家蔵）

イフティハール・ガーディー＆スリヤ・ハーディー「ディパキスタン」（「小の星」2022年、作家蔵 ガラン氏）

アーイシャ・ハーリド「パキスタン」（「愛の証」2021年、作家蔵 Chaska Brown）

ヴィヤーナ・ウィジャンスカ「ラ・ヴィーニャ」（「Ghost Lake」2021年）、福岡アジア美術館



スヴィーハ・ヌ「ドンドン」（「無題の連作」2014年、福岡アジア美術館



コミュニティ・ボックス



お気に入りの作品を お土産として持ち帰ってほしい

椋　今回、新たな試みとして、本シリーズを何度でも鑑賞できる年間パスポートを導入しました。また、お気に入りの作品を持ち帰る感覚で集められるコレクションカードの無料配布も始めました。

五　コレクションカードは人気気すぎて、毎日あっという間になくなっちゃいますよね。

椋　「東アジア編」では1日20枚限定で配布しているので、午前中の来館がおすすめです。

五　同じアジアといえども、東アジア、南アジア、東南アジアでそれぞれ表現の傾向が異なります。年間パスポートも活用しながら、1年を通してじっくり見ていただけたらいいですね。例えば女性の描き方一つを見ても、東アジアは細身、南アジアは肉感的、東南アジアは3字のフィンで表現しがちというように、そうした違いを見比べることで、それぞれの地域の価値観や歴史、社会情勢などが見えてくることもあると思います。

作家と歩み、 アジア美術をつないでいく

佐　今回、事前の現地調査にもかなり力を入れました。作家のスタジオを訪ね、今どんな作品を制作しているのかを見せてもらい、近作や新作展示の交渉を進めていきました。

椋　みんな南アジアを代表する作家ですが、とても気さくに受け入れてくれましたね。

五　初期の頃からともに歩んできたという思いや、あじびに対して信頼してくれているからでしょうね。例えば、今や世界各国で数々の賞を受賞しているナリニ・マラニも、1999年のレジデンスであじびに来てくれました。彼女の代表作の一つであるハムレット・マンションは、福岡滞在中に制作したものです（裏面でも紹介）。今招聘しているレジデンス作家も、30年後には同じようにスター作家に成長されるかもしれない。そうした歩みを積み重ねながら、今回のような企画がさらに未来へとつながっていけばいいですね。

美術の歩き方 アジア

南アジア 特別編

ASIAN ART WALK

知らないからこそ面白い！ 南アジア美術の扉をひらく旅。

アジア美術に初めて触れる人にも親しみやすい形で
3つのエリアに分けて紹介するシリーズ展「アジア美術の歩き方」。
2回目となる南アジア特別編では、インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、モルディブの現代美術作品が一堂に会します。
3名の担当学芸員が、本展の見どころや
企画に込めた思いを語りました。




立から
椋梨彩香
五十嵐理奈
佐々木文太郎
（収集展示係）

第1部では「出会う」をテーマに、南アジアを代表する作家の所蔵作品や大型インスタレーション、近作・新作をご紹介。第2部では「ひもとく」をテーマに、絵画や彫刻など多彩な作品群約100点を展示し、7階フロア全体が南アジアの現代美術で溢れます。

対立の先へ～ 光の水脈をめぐる旅

2026.9.19㊏ → 2027.1.11㊊祝

作家との絆から生まれた、あじびならではの企画

佐々木（以下 佐）　ここまで南アジアの現代美術が集まる展覧会は、日本ではなかなかないですよね。

五十嵐（以下 五）　長年にわたってアジアの作家たちと関係を築いてきたあじびだからこそ実現できた企画だと思います。

椋梨（以下 椋）　そもそも、なぜ日本では南アジアの現代美術に触れる機会が少ないのでしょうか。

佐　単純に、知られていないからだと思います。アジアの中でも、特に南アジアは日本から地理的に離れています。

五　地理的な距離の遠さが、心理的な距離にも影響している部分もあるのかもしれませんね。「インド」と聞いて思い浮かぶイメージはあっても、近現代の社会や政治について知る機会はあまりない。だからこそまずは作品に出会って、その地域に興味を持ってもらえたら嬉しいです。

予備知識なしでも 感覚的に楽しめる

佐　本シリーズ展は入門編の位置づけなので、真度なテーマを掲げ下げるというよりは、「アジア美術って面白いんだ」という入口を作ることが一番の目的です。そのため、ビジュアルにインパクトのある作品を選ぶなど、予備知識がなくても感覚的に楽しめる展示を意識しました。

五　この展示スペースをフルに使った規模感もポイントです。第1部では、スター作家による大型インスタレーションや代表作を通して、まずは作品そのものの迫力を体感していただきます。続く第2部では、政治や宗教などのテーマやポップな大衆美術も含め、国の背景を読み解くような展示構成にしています。

椋　あじびが初期作品を所蔵するイフティハール・ガーディー、グリ・アル・マルーン、ヴィヤーナ・ウィジャンスカ（Ghost Lake）2021年



アーイシャ・ハーリド「パキスタン」（「愛の証」2021年、部屋から見てある）2019年、作家蔵　撮影 Chaska Brown

ヴィヤーナ・ウィジャンスカ「ラ・ヴィーニャ」（「Ghost Lake」2021年）、福岡アジア美術館

スヴィーハ・ヌ「ドンドン」（「無題の連作」2014年、福岡アジア美術館

コミュニティ・ボックス

あわせて
「福岡初」が満載！
南アジアの文化に浸る
スペシャルライブ＆
トークイベントも開催！

公式SNSはこちらから

SOUTH ASIA Through the Veins of Light

AJIBI News vol. 100

あじびニュース



100号の表紙には、日々美術館を支えるあじびスタッフが部署の垣根を超えて登場。
時間の制限により登場できなかったスタッフも、あじびの仲間として下記に名前を掲載します。
中尾智晴、藤井亮、宮川緑（学芸課）
加藤麗華（総力戦工課）
松野光沙、大曲綾子（運営課）

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

あじびニュース創刊100号記念特集

あじびと まちの未来

1ページ半の特集は、アジア美術館と、美術館を専門に扱う世界唯一の雑誌「あじびニュース」。さらなる魅力の向上に向けた、プロジェクトランペット前編。未来とは？

あじびは、まちとともにある」美術館

山本 裕子 / 山本 裕子 建築設計事務所

「あじびニュース」の編集長、山本さんは、福岡市美術館（仮称）の設計を手がけた建築家でもあります。

大嶋 祐子 / 大嶋 祐子 建築設計事務所

2021年度グッドデザイン賞受賞。福岡市美術館（仮称）の設計を手がけた。

鴨川 真琴 / 鴨川 真琴 建築設計事務所

2021年度グッドデザイン賞受賞。福岡市美術館（仮称）の設計を手がけた。

山本 裕子

あじびは、アジア美術館の、まちとともにある美術館を目指します。あじびがまちの資源としてあり続けてきたことに対し、この意識がまず、すごくいいなと思ったんです。

大嶋

まず、建築は、2023年に、福岡市美術館（仮称）が、完成するんですが、すでに市民から期待の声が寄せられています。そこに、あじびが、ともに、市民の方、あるいは、ビジターの方、そういった、いろいろな、人たちが、集まってくる、人が集まってくる、そういう、ハブの、ポジションを、あじびが、担っていくのかなと思っています。

鴨川

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

大嶋

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

鴨川

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

作品の奥に見える アジアの「今」

大嶋

実は最初からずっと、アートとは、とか、建築とか、ってことを、ずっと、考えてきたんですよ。ここで、勉強させていただいたのは、まず、あじびは、単に、美しい、絵とか、作品を、見せるだけじゃなくて、作品の、奥に、見えてくる、アジアの、今、っていうのを、あじびの、基本、コンセプトとして、ずっと、意識を、持っている、ってことです。

鴨川

あじびは、単に、美しい、絵とか、作品を、見せるだけじゃなくて、作品の、奥に、見えてくる、アジアの、今、っていうのを、あじびの、基本、コンセプトとして、ずっと、意識を、持っている、ってことです。

山本

あじびは、単に、美しい、絵とか、作品を、見せるだけじゃなくて、作品の、奥に、見えてくる、アジアの、今、っていうのを、あじびの、基本、コンセプトとして、ずっと、意識を、持っている、ってことです。

大嶋

あじびは、単に、美しい、絵とか、作品を、見せるだけじゃなくて、作品の、奥に、見えてくる、アジアの、今、っていうのを、あじびの、基本、コンセプトとして、ずっと、意識を、持っている、ってことです。

鴨川

あじびは、単に、美しい、絵とか、作品を、見せるだけじゃなくて、作品の、奥に、見えてくる、アジアの、今、っていうのを、あじびの、基本、コンセプトとして、ずっと、意識を、持っている、ってことです。

山本

あじびは、単に、美しい、絵とか、作品を、見せるだけじゃなくて、作品の、奥に、見えてくる、アジアの、今、っていうのを、あじびの、基本、コンセプトとして、ずっと、意識を、持っている、ってことです。

まちの資源として あじびを盛り上げる

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

大嶋

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

鴨川

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

大嶋

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

鴨川

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

偶然アジア美術に出会い、親しめるまちへ

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

大嶋

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

鴨川

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

大嶋

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

鴨川

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

山本

あじびは、まちの、ハブ、ポジションを、担っていくのかなと思っています。

「美術館で待ち合わせ」が、見慣れた風景になる。

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum
〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7-8階
TEL 092-263-1100 FAX 092-263-1105
https://faam.city.fukuoka.lg.jp

あじびニュースvol.100 2024年9月1日発行
企画・編集・発行 福岡アジア美術館 編集・執筆 後藤麻与 片岡絵野
デザイン 吉田朋美[99] 印刷 アカツ印刷

感想アンケート

100号発行を機に、ご感想やご要望を募集しています。今後のあじびニュース制作の参考にしますので、ぜひ皆さまのお声をお聞かせください。

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00（金曜・土曜は20:00まで）※ギャラリーへ入るは閉室30分前まで
開館時間 9:30-19:30（金曜・土曜は20:00まで）アートカフェ営業
休館日 毎週水曜日（水曜が休日の場合はその翌平日、ただし8月中は無休）
年末・年始（12.26～1.1）

あじびと「コレクション」とミュージアムの未来

次の100号を目指して、地域の宝であり、アジア美術の知財である所蔵作品をテーマに、あじびの歩みと未来について考えます。学芸スタッフ8名をそれぞれ選んだ「あじびの未来」を映す一作とは。

1979 福岡市美術館 開館 **1999** 福岡アジア美術館 開館 **2026** 福岡市、アートのまちへ

【市美からはじまり】→【あじびへとつなぎ】→【作品を未来へ託す】

100号の今、私たちが伝えたいもの

美術もっと自由で開かれたものである。



1998 サヤー・ソオ（ミャンマー）
（王室の肖像）19世紀末－20世紀初頭、グワンシュー作

未来のスター作家は身近なところに。



2005 松前知子 / 中之島美術館 学芸員

ホー・ズーニニン（シンガポール）
（ウクマー 歴史に現れたるはすべて我なり）2003年、転写インク、アクリル・画布、ビデオ（21分）

ホーズーニニンさん、今年の「福岡アジア文化賞」大賞の受賞おめでとうございます！彼にはじめて会ったのは、2004年のシンガポール調査の時でした。まだ日本でも未紹介の作家でしたが、このアーティストであれば：「第3回福岡アジア美術トリエンナーレ」の候補作家にリストアップしました。でも、当時だったのは、作家選考委員会で評価されたことよりもこのアーティストであっても、それは十分に起こりうることですし、しかしそれでも、自分たちの見方を信じて発信し続けることが、あじびの存在意義だと思っています。可能性を秘めたアーティストはまだたくさん。もっと紹介していきたいです。

2006 ハーディム・アリー（パキスタン）
（踊るいないお月所）2006年、水彩・鉛筆・金箔ほか・紙

ライオンの絵

子どもの感性に驚かされた。



中之島美術館 学芸員 / 中村 裕太

ライオンの絵は、ジャンプ、ジャンプ、ジャンプ。ジャンプ、ジャンプ、ジャンプ。ジャンプ、ジャンプ、ジャンプ。